

《原著》

多面的な親子関係の発達モデルを探る

—Attachmentから間主観的companionshipへ—

中野 茂

**A Theoretical Exploration for the Developmental Model
of Parent-Child Versatile Relationships:
From Attachment to Intersubjective Companionships**

Shigeru NAKANO

Abstract : Human relations can be divided into two types; the vertical and the horizontal ones. In developmental psychology, traditionally, parent-child relationships have been regarded as the vertical, while peer relationships as the horizontal. Based on the myth of infant determinism, it also has been believed that all later developments are determined by early attachment. As the result, parent roles also have been unified into an attachment figure for their children. However, recently new viewpoints opened several controversial discussions which takes issues with those traditional views. They reconsidered the parental role and which takes versatile roles including not only an attachment figure, but also a teacher, and a playmate for children. It is proposed that as attachment behavior system is activated under threat, it may be theoretically incorrect to correlate it with activities in playful contexts. The global influences of an early secure attachment on later behavior also are considered as the result of “all good things go together.” Those new proposals indicate that we need a new integrated theory to understand reality of interpersonal relationships. In this review, I will propose a systemic model considered versatile roles of parents based on the theory of intersubjectivity and companionship to better understand human relations.

Key words : 人間関係 (human relation), 間主観性 (intersubjectivity), アタッチメント (attachment), コンパニオンシップ (companionship)

1. 関係性発達の統合的視点の欠如

(1) イデオロギーとしての縦・横の関係

この社会での対人関係を大きく二分すれば、縦の権力・権威、社会慣習による支配—服従、優位—劣位、保護—依存などの関係と、横の平等、同類、互惠、民主的、共同などの関係として捉えられる。縦の関係としては、主人—従者、上司—部下、教

師—生徒のような権力・権威の差異や、年上—年下、男—女、夫—妻間などの社会文化的な権力の違い、親—子などの保護と依存などの関係が含まれ、横の関係には、友達、同年齢・同学年、同資格、夫婦などが含まれる。このような縦・横の関係の見方は、様々な分野の多くの人々に広く受け容れられてきたが、社会文化的・宗教的な因習や差別による縦の関係をいかに 20 世紀の民主主義という社会体制・政治的理念である横の関係を構

築していくかとするかというイデオロギー問題を常に伴ってきた。たとえば、古くには、Lewin、Lippitt & White (1939) の民主的、専制的、自由放任的というリーダーの3タイプの比較研究から、民主型が仕事への動機づけや創造性の面で優れ、専制型では成員間に敵意と攻撃性が高まり、放任型では仕事の量も質も最も劣ると結論づけられている。この知見を受けてBaumrind (1969) は、親の関わり方を統制と情動の組み合わせから、権威のある親、権威主義的な親、受容的な親に分けたが、受容的親は子どもを甘やかし、権威主義的な親は統制だけが強く、Lewin の民主的に相応する権威的な親だけが愛情を持って相互的なコミュニケーションに努め、子どもが納得できるルールを提示する理想的な親とされた。

同様のイデオロギーは日本文化の特異性を縦の関係から指摘した古典的日本社会論である中根千枝の『タテ社会の人間関係—単一社会の理論』(1967) にも認められる。つまり、日本的集団の構造には『タテ』の組織という共通構造がみられ、このタテ関係は官僚組織など同列におかれなない関係であり、同類集団内でも『差』が設けられることによって精緻な序列が形成される。そのため、日本ではあらゆる層において同類集団ができず、このことがさらにタテ関係を強くし、ヨコ関係を弱くするのだという。甘えに着目をした土居(1976)の理論でも同様に甘え—依存という縦の関係によって日本の文化が描かれている。

これらの古典的な研究は、対人関係をいかに封建的なタテ関係社会から民主的なヨコ関係社会へ移行させていくかというイデオロギーに基づくtypologyの範囲に留まり、対人関係全体の把握へと向うことができなかったと思われる。同様のことは、後に述べるように、親子関係の発達研究の背後に潜んでいる乳児決定論の暗黙の影響についてもいえるように思われる。

(2) Piaget の進化と行動のモデル

縦・横の関係を生物学的な視点から眺めると、親子という世代間でのその種の遺伝コードの伝達は縦の関係であり、個体が受ける環境の影響、異性の仲間とのカップリングは遺伝形質を拡散させる横の関係といえよう。換言すれば、種の行動は前の世代から受け継いだ遺伝子型によって決定されるのか、生活環境への適応の結果として獲得した表現型によって決定されるのかの問題ともいえる。かつて、Piaget (1967/1987) は、遺伝子を遺伝形質を発現させる役割を担うものと、環境条件に反応をして多数の潜在的な遺伝子の中から特定のものを表現型へと導く調節遺伝子に二分し、環境条件に適応するための調節の結果出現する表現型の変異(表現模写)に注目をした。このことによってPiagetは、ラマルクの獲得形質の遺伝という困難を回避して、進化と心的発達の間を橋渡しできるのだと論じた。つまり、こうして、種に共通な形質とその個体に特有な特徴は縦の関係の中で子孫に伝承されると同時に、横の関係で築かれた新たな遺伝子の組み合わせによって多様化していくと考えられたのである。

このPiagetの考えは、遺伝と環境の問題であり、縦・横の対人関係とは異なるが、世代間の遺伝コードの伝達によって決定された行動を環境への適応自体によって柔軟なものにするという相互作用モデルを提出している点で、以下の考察には示唆的といえる。

(3) 発達研究における縦と横の関係：親子関係 vs. 仲間関係

発達心理学研究での縦・横の対人関係といえば、縦の親子関係と横の仲間関係に容易に分けられる。しかも、「仲間」の定義は、同年齢集団を意味するpeerに限定し、縦・横二つの関係は独立したものであるとされてきた。たとえば、Hartup (1989) は、縦の関係を親子のように個人間の能力や地位の異なる場合の関係で、上位者が寄り豊かな知識や力によって下位の者を統制し保護するが、ピアー同士のような横の関係では、力が均衡

しているため、競争や互恵的行動が生じやすいというようにその機能・役割が異なると述べている。また、親子のやりとりは平等な関係ではないので、そこで学んだスキルはピア関係には転移しがたい (Mueller & DeStefano, 1974) という主張は、度々繰り返されてきた (e.g., Feiring & Lewis, 1989)。そのため、親子関係では養育・保護と依存・アタッチメントが、ピア関係では遊びや友情・恋愛が主な機能・役割とされ、二つの関係性は異なる役割を担っていると固定されてきた (Durkin, 1995)。さらに Macdonald (1996) は、人類はピアが備えている互恵性 (reciprocity) と類似性に引きつけられる傾向を進化の過程で獲得してきたと、かつての民主主義のイデオロギーのような主張をしているが、このことはピア関係が親子関係とは独立したユニークなシステムであることと同時に、親子関係が非互恵的、非均衡的な関係性のシステムであることを示唆している。

しかし、このように親子関係とピア関係を独立したものとして固定してしまうことは、後に述べるように、乳児決定論の枠組みから抜け出していないことを示していると同時に、親、ピアともに多様な関係の中で多様な役割を演じているという事実を見落とすことになる。むしろ、両者を統合した視点が必要なことを以下では論じていく。

(4) ピア関係の発達の遅延性

上述の、親子関係と仲間関係の機能・役割、意義の異質性、独立性という、いわば常識的な信念は、乳児期にはピア関係の成立は困難であり、児童期まで友達は発達にとって重要ではない (Sullivan, 1953) というもう一つの伝統的、常識的な信念と結びついてきた。これは、Parten (1932) の一人、平行、傍観、集団という遊びの発達段階や、乳児同士の相互的なやりとりは 14～18 か月までは認められず、それまでは「社会的盲 (social blind) の状態にある (Maudry & Nekula, 1939) という古典的な研究を背景として

いるといえる。しかも、このような発達初期には仲間関係は機能しないという主張は、Reddy, Hay, Murray & Trevarthen (1997) が指摘するように、古典的な研究ほど極端ではないとしても、現在でも多くの研究者にしみ込んだまといえる。そのため、ピア研究の多くは、家族は小学生にとって重要ではあるが、中学生では友達が重視される (Buhrmester & Furman, 1987)、少年では家族と過ごす時間は児童の半分でしかなかった (Larson & Richards, 1991)、家族から友達への一体感のシフト (Bowerman & Kinch, 1959)、親からの情動の離脱 (Steinberg & Silverberg, 1986)、親との情動的葛藤と距離感の増加 (Steinberg, 1987) などの研究が繰り返されている。この信念を支えている理由は、ピア関係は友情と不分離なため、Vandell & Mueller (1980) が定義したように、相互に好意を持って楽しさを共有するような「友情」は、2歳近くなしないと認められないためといえる。事実、Hartup (1989) は、たとえ 6 か月児が他の乳児に興味を示し、トドラーが他の子と遊ぶとしても、真の「ピアとの関わり合い」 (peer companionship) を好み始めるのは幼児期なので、横の関係が出現するのは 3 歳頃であると主張している。

このように、「友情」というピア関係に特有な領域固有性の基準を課することで、少なくとも、乳児期では“この意味での”横の関係は困難である (Laursen & Bukowski, 1997) と結論づけられてきたのである。そのため、『1歳児のピア関係は貧弱で、たぶん、この力 [ピアと関わる力] は仲間とではなく、大人とのやりとりを通じて習得される』という Bronson (1981, p. 111) の主張は、次節で述べるピア関係に対する親子関係の優越性をまさに肯定したものといえる。

しかし、最近の研究からは、6 か月児同士でも大人の助けなしに、意図的・情動的な交渉ができる (Selby & Bradley, 2003) ことが報告されているように、このような伝統的な信念は、親子関係の絶対性という傘の下で「仲間」と関わる力を限

定的に捉えてきた弊害に過ぎないのではないだろうか。さらに「仲間」をピアーに限定せず、後述するように、共同して一緒に関わり合うコンパニオン (companion) として捉え直すことで、新たな視点が展開されることになるだろう。

(5) 親子関係の優越性

Winicott のよく知られている言葉、『私たちが赤ん坊を見るときには、周囲の支えと、その背後にいる母親を見る』(1992, p. 35) が示すように、赤ん坊は親子という社会的関係の中に生まれ落ちる。通常、親子は血縁と愛情で結ばれた関係の中でボンディングとアタッチメントという自然発生的な情動的結びつきを形成する。この意味で、親子、特に母子という縦の関係は、何にも優先される最初でかつ優越的、永続的な影響力を持つと信じられてきた。とりわけ、フロイトの超自我やエリクソンの基本的信頼、ローレンツの刷り込みなどの古典的理論では、乳児期の経験にその子の将来を左右する影響力を与えてきた。Bowlby (1953) もまた、母子アタッチメント関係論を提唱してこの信念に立っていたといえる。彼は、母子関係こそが人間形成の根元であり、ピアー関係を含む他の対人関係はそれを基礎として派生する (漸成説 Epigenetic Principle) と唱え、『3歳以下の子どもを親から引き離すことは、それが、その子にとってよいことだといえる十分な理由がある場合だけに限られ・・・決してその子どもが知らない人のもとに置かれることがあってはならない』(Bowlby 1953, p. 16) と主張した。ただし、現在では、この主張は「3歳児神話」として否定されている。

Kagan (1998) は、このような初期経験の決定的な影響を主張する理論は発達研究の中で、アタッチメント研究、脳の影響、臨界期などの衣を装っていまだに明示的、暗示的に引きも切らさず提出され続けていると指摘し、しかも、それらは事実よりもただ単に乳児決定論に魅惑された信念に基づいているに過ぎないと断じている。Bruer (1999) もまた、脳の発達が3歳までのシナップ

ス接合で決まるという脳神経学の考えを「初期3年の神話 (The myth of the first three years)」と呼び、乳児決定論は根拠がないか、わずかな根拠の拡大解釈に過ぎないと結論づけている。実際、脳の発達は青年・成人期でも継続して新しい神経の流れを形成し、変化し続けているという最近の研究成果 (Strauch, 2003) によれば、Piaget (1967/1987) が調節遺伝子を重視したように、決定論者が考えた以上に、我々の脳は環境の影響に柔軟だと考えられる。Rutter (1998) もまた、2歳以下の時にイギリスで養子となったルーマニアの孤児が4歳までに健常な認知水準になったことから、どのような過酷な状況で育ったとしても心理的な機能で取り返しのつかない問題となるとは限らず、たとえ、insecure なアタッチメントのような負の初期経験をしたとしても、後の養育が適切であれば連続した影響力を持たず、人生は常に可塑的で、可変的であり、過去のプロセスの結果 (end products) であるとともに将来への原動力 (instigator) として理解されなければならないと主張している。

このような批判にもかかわらず、人生の最初の数年間の養育者との関係の質がその子の人生にとって決定的であり、insecure なアタッチメント関係にあった子どもは社会情緒的適応の永続的な問題を持つ (e. g., Sroufe, 1979, 1983; Sroufe, Fox, & Pancake, 1983) という主張は、今日でも多くの人々に受け容れられ続けている。さらに、最近アメリカで行われた大規模な保育園児の縦断研究からは親子アタッチメント関係は、たとえば家庭外保育を経験しているとしてもその影響からは独立であり、乳児期の親の感受性によって一元的に決まる (NICHD, 2005) と結論づけられている。しかも、アタッチメントは、ますます認知、情動、社会性、そしてピアー関係を含めた人生のあらゆる面での発達の方向性とその個人差を支配する決定因とされ、一旦成立した親子アタッチメント関係の質がその後の人生の発達を決定づけるという主張は、初期の親子関係のあり方が万能な説明概念として広く受け

容られていることを示している (e. g., Belsky & Cassidy, 1994; Cassidy, 1994; Contreras, Kerns, Weimer, Gentzler, & Tomich, 2000; Grossmann, Grossmann, & Zimmermann, 1999; Thompson, 1998)。しかし、そこには、かつての民主的な親と同様に親の理想像への思いこみがあるように思われる。しかも、わが国でなされた縦断研究からは、乳児期の母親への insecure なアタッチメント (主にCタイプ) の影響力は2～3歳頃までで、その後は secure な子どもたちとの社会情動的な行動の違いは認められなくなる (三宅, 1991; 中野, 1991) ことが見出されている。

この乳児決定論の信念の強さは、ピアー関係に限定しても、乳児期の母親への secure なアタッチメントは insecure な子よりも幼児・児童になったとき、ピアーとよりよい関係を形成する (e. g., Arend, Gove, & Sroufe, 1979; Booth, Rose-Krasnor, MacKinnon, & Rubin, 1994; Contreras & Kerns, 2000; Kavesh, 1992; LaFreniere & Sroufe, 1985; Lieberman, 1977; Pastor, 1981; Pierrehumbert, Iannotti, Cummings, & Zahn-Waxler, 1989; Schneider, Atkinson, & Tardif, 2001; Suess, Grossmann, & Sroufe, 1992; Waters, Wippman, & Sroufe, 1979; Youngblade, Park, & Belsky, 1993) という順行的な影響だけではなく、幼児期 (Jacobson & Wille, 1986; LaFreniere & Sroufe, 1985)、児童期 (Cohn, 1990; Kerns, Klepac, & Cole, 1996; Lieberman, Doyle, & Markiewicz, 1999; Youngblade & Belsky, 1992) の父母との secure なアタッチメントの子どもはよりよい友達関係や友情を育む、さらに、最近の大人の研究でも secure なアタッチメントをピアー (親友、恋人) との間で築ける成人は他者との問題をうまく解決できる (Saferstein, Neimeyer, & Hagans, 2005) など枚挙に暇がない。

しかし、前述したように、独立な関係性システムとして固有の機能・役割を措定されてきた親へのアタッチメント行動といういわば縦の関係が、なぜもう一つの関係性システムであるピア

ーという横の関係を規定するのかは、必ずしも明確に説明がなされているわけではない。これまでの説明としては、アタッチメント対象者が子どもに安心感を与える secure base (Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978) となることで、その子が新しいことに挑戦できることからアタッチメント関係が他の心理機能に決定的な影響力を持つようになる (Ainsworth, 1991)、親子のアタッチメント関係で築かれた内的作業モデルが仲間関係に一般化される (Cassidy, Scolton, Kirsh, & Parke, 1996)、あるいは、親子のアタッチメントの質がピアーとの親密な関係の質に般化する (Lieberman, Doyle, & Markiewicz, 1999) などの考えが提出されてきた。しかし、insecure なアタッチメントとされた子のすべてがピアーとの関係を含む社会情動的な面で問題を持つのではなく、その一部にしか当てはまらない (Lyons-Ruth, 1996; Thompson, 1998) ことも確かである。さらに、ピアーとの出会い、交渉が secure base が必要なほど“危険・不安”なことかどうか疑問である。ピアーが与えてくれる安心感もあるはずである。新奇な物への接近と人への接近とを区別することなく、secure base で説明するのは困難なのではないだろうか。

しかも、不安なときには親にアタッチメントを求めるが、ピアーには一緒につきあうことを求める (Kerns et al., 2006) というように、両者は異なる文脈にある独立なシステムとも考えられる。また、そのような場面で、たとえ secure な関係にある親の存在が探索の secure base としてピアーへの好意を強め、社会的不安を低減させたとしても、アタッチメント関係自体はその次にその子がとるべき行動、すなわち、社会的交渉スキルの源泉とはならないのではないだろうか。つまり、secure base の仮説では、アタッチメントがどんなに安心感の持てる場を提供し、それを糧に不安を克服して新しいことに挑戦できるとしても、その挑戦自体は子どもの自力で試行錯誤を通して成さなければならないことになる。まさに、Piaget の認知発達理論では子どもたちを“孤独

な科学者”として見ていたと批判されたのと同じ問題を含んでいるといえよう。

(6) まとめ

ここまで論じてきたように、対人関係を縦横に二分したとき、これまでの発達心理学的研究では縦の親子関係と横のピア関係に二分された研究領域が存在し、親子関係は力の違いによる養育・保護、指導・監督—依存、従順、ピア関係では互惠性、対等性による遊び、協力、友情、競争、恋愛など、それぞれの関係の固有な特徴と役割が想定されてきた。つまり、両者を独立な関係性のシステムと見なし、親とピアの役割をそれぞれのシステムの範囲に固定をした見方をしてきたのである。そのため、これまでの多くの研究では、親子関係とピア関係は独立した研究領域としてそれぞれの分野で多くの研究者がそれぞれのテーマの研究を進めてきた。同時に、ピア関係を友達関係という視点から友情に焦点化することで、その出現を幼児期以降、少なくとも乳児期には“真の仲間関係”の成立は困難であるという見方が一般化されてきた。

この横の関係の背後にある信念は、乳児期の親子関係、とりわけ母子関係が後の性格形成、適応的な人生を決定するという乳児決定論に呼応するものと考えられる。なかでも最も強固にその砦に立て籠もり続けているのがアタッチメント研究といえる。そこでは、多くの成果から、親へのアタッチメントの質こそが後に発達するすべての心的機能を決定し、その個人差を説明する万能的な根源であるかの如く主張され、ピア関係の成否も

また、親とのアタッチメント関係から予測されるものと見なされてきた。このような伝統的な親子関係とピア関係の見方を示すと図-1になる。

2. 問題提起

(1) アタッチメントの文脈性

以上の考察から問題となるのは、まず、もし親子関係とピア関係が固有な関係性の中にあるとするならば、なぜ、どのようにして親子関係の中で形成した行動がピアのやりとりに必要なスキルに転移するのか、あるいはいかに有利に働くのかという疑問である。上述をしたように、これまでの研究からのこの問いへの答えは不十分といえる。そればかりではなく、これまでのようなアプローチからは十分な答えは得られないのではないかと考えられる。なぜならば、Kagan (1998) が、今、私たちにとって必要なことは乳児決定論を発達決定論 (developmental determinism) に置き換えるのではなく、決定論自体に代わるものであると論じたように、親子関係に決定因を付与し、そのアウトカムを論じる直線的発達観に代わる、プロセス、文脈、多重の影響関係を考慮した対人関係全体のシステムへのアプローチだからである。つまり、基本的な視点の転換が求められているのである。

このような新しい動きとして、アタッチメント関係の影響範囲を特定の領域、すなわち、心身の危険・危機・脅威への不安やその克服と安全などに限定をすべきだという主張が最近提出されつつある。Grossmann, et al. (1999) は、我々の行動を危険な状況でアタッチメント対象に接近する傾向 (propensity) と、安全な状況でアタッチメント行動を低減させて遊びや探索に従事する傾向に分けて論じている。Macdonald (1992) は、アタッチメントと「暖かさ (warmth)」とは、それぞれ negative な情動、positive な情動とを下敷きにした生物学的に異なる行動システムであると論じている。つまり、アタッチメントは恐怖からの保護と関連した情動—動機システムであり、

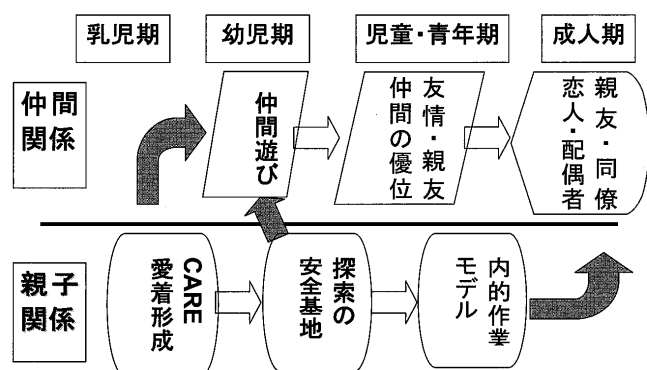


図-1: 伝統的な視点: 親子・仲間関係の独立性、乳児決定論、仲間関係の発達遅延

親密さのような positive な情動—動機システムからは区別されなければならないというのである。Bowlby もまたアタッチメントの機能について、元々、「捕食者からの保護」を想定していた（近藤，2001）という。実際、乳児期のアタッチメントが Strange Situation Procedure という未知の状況での母子分離によって子どもから緩やかな不安・ストレスを誘発するような負荷をかけた negative な状況で測定されていることを考えれば、このことは理論的には当然に思われる。むしろ、このようなストレスフルな状況で測られたアタッチメントの質の違いが、なぜ遊びという楽しい状況が大半であるピア関係に影響を及ぼすと主張できるのかの方が不可解ではないだろうか。

アタッチメント研究者である Waters, Corcoran, & Anafarta (2005) は、元々、アタッチメントは親密な関係だけを対象としてきたはずなのに、明確な説明理論を欠いたまま、「all good things go together」として secure なアタッチメントが他の領域と関係を持っているかのように拡大をしてきたことを認め、その好例として仲間関係への影響を挙げている。つまり、望ましい親子関係と望ましいピア関係とが併存した全体的に望ましい発達状況にある子どもは珍しくはないのであり、両者の相関が認められたとしても、それが先行条件として使われてきたアタッチメントの結果であるかは、必ずしも事実を反映していない可能性があることに留意すべきだというのである。いわば、親子の IQ の相関が高いとしても、それが親の IQ の遺伝ではなく、親が知的に優秀であれば、子どもは恵まれた環境で育つ確率が高く、その結果子どもの IQ も高くなるのと同様である。つまり、直線的モデルからアウトカムを探し出そうとする限り、この問題は克服されないといえよう。

したがって、仮にアタッチメントがピア関係に影響を及ぼすとするなら、それはどのような文脈の場合かを明らかにすることがまず必要であり、それによって両者の影響関係を明確化することができるのではないかと考えられる。少なくとも

も、親子アタッチメント関係の全体がピア関係の全体と相関をしているというのではなく、前者が後者の文脈である遊び、協力、友情、競争、恋愛などの特徴のいずれと関係を見いだせるかを明らかにすることが必要ではないだろうか。こうしたアプローチに立つことで、従来のアタッチメントのような万能な影響力を想定するのではなく、Macdonald (1992) が主張したように、人間の行動は複合的な動機システム (discrete human motivational systems) から成り立っていること、それが特定の文脈において影響力を持つことを明らかにできることになるのではないだろうか。

（２）親子関係の多面性

上述のように、これまでの研究の多くでは、親子関係での親の役割を養育・保護、指導・監督などの養護性に限定した見方がとられてきたが、文脈による行動、そして役割の違いを考慮に入れたアプローチをいったん採れば、親は多重の役割を担っているという日常の現実では当然な事実が再発見されることになるだろう。たとえば、親が子どもの遊び相手になることは日常では珍しいことであるだけでなく、親子遊びが子どもの発達に重要であることは多々言われてきた (Fromberg & Bergen, 1998; MacDonald, 1993)。とりわけ乳児期では、親が子どもをあやしたり、くすぐりやコミカルな発声や“いないいないばあ”などのゲーム様のやりとりをしたりして笑わせるなど、親との遊びは、乳児にとっては「思考の揺籃」(Hobson, 2002) として重視されてきた。しかも、すべての愛情ある親は、子どもと一緒に学ぶことを楽しむ (Nakano, 1998, 2001; Reddy, 2001) と同時に、保護者として、いわば、子どもを喜ばせるためのサービスとしてではなく、親自身がプレイメイトであることを楽しんでいる (Nakano, 2001)。同時に、遊びのエキスパートとして遊びが発展するための足場を提供している (Fromberg & Bergen, 1998) こともまた知られている。

さらに、子どもとのやりとりで、ある親は教師、

遊び相手、安全基地のすべてを演じ、別の親はそのいずれかを演じるような親のやりとりの個人差が認められることから、それらのシステムは別な働きをしていることも示されている (Grossmann & Grossmann, 2000; Thompson, 2005)。また、親が子どもと同じ視点に立ちつつ、同時に、大人としての視点を維持するような多重の視点 (multiple perspectives) で子どもと関わっていることも報告されている (Maccoby, 1992)。つまり、アタッチメントは実際には子どもの発達を生み出し、方向づけている全体的な社会的システムの一部 (Levitt, 2005) にすぎないのではないかと考えられる。

親の役割をこのような多面的な視点、とりわけ遊び相手としてとらえることは、親子関係が従来の研究で信じられてきたような縦の関係に限定されるのではなく、いわば横の関係も含んでいることを浮かび上がらせる。上述したように、アタッチメントを危機的、不安な、ストレスフルな状況という「negative な場面」での保護・安全、救援・救済を求める行動、そのような場面での関係性だと定義すると、保護や救済を求める側とそれを提供する側の二者の力関係は非均衡と考えられ、縦の関係となるだろう。一方、楽しみを共有するプレイフルな「positive な場面」で現れる行動や関係性は、それとは異なる横の関係となるだろう。つまり、親子の関係には文脈によって異なる行動形態と関係が生起するのだと考えられる。したがって、もし、親子がこのような縦横の関係にあるとすると、問題は、このような親子のプレイフルなやりとりとアタッチメントとは同じ親子関係の中でいかに関連しているのかになる。さらに、それぞれがピア関係とどのような影響関係を持っているのかである。たとえば、両者が相関をしていて、親子の遊びがピアとの遊びと相関し、その結果、アタッチメントとピア遊びとの相関があるのかも知れないというように。

このような親の役割の多面性が指摘されたのは決して、最近のことではない (Crittenden, 1988; Maccoby, 1992)。それにもかかわらず、

このような親子関係の多面的関係の側面が相互に影響し合っているのかそれぞれ独立した関係を構成しているのかが検討されないまま等閑視されてきた (Grossmann & Grossmann, 2000) のは、結局は、アタッチメント理論の直線的発達観の負の影響のためなのではないかと考えられる (Levitt, 2005)。つまり、Thompson (2005) が強調しているように、多重な関係にあるものは多重なものとしてとらえるという当たり前のことが、追求されないままにされてきたのである。しかし、これまで中心的にアタッチメント研究を進めてきた Grossmann (Grossman, et al., 1999; Grossman & Grossman, 2000) もまた、アタッチメント対象に接近する行動傾向は危機的な状況で生起し、安全な状況で遊びに従事する行動傾向とは異なることを認めている。しかも同様な視点は既に青年・成人のピア・アタッチメント研究 (Armsden & Greenberg, 1987; Field, Diego, & Sanders, 2002) ではピアへの友情とアタッチメントの違いを比較する (e.g. Weimer, Kerns, & Oldenburg, 2004) なかで暗に用いられ始めている。したがって、今後、親子を含む関係発達の全体について、このような多角的、文脈的なとらえ方が展開されていくのではないかと考えられる。

3. Trevarthen の間主観性とコンパニオンシップの理論へ

(1) コンパニオンシップ

さて、ここまで論じてきたように、親の役割には、危険—安全という negative な次元でのアタッチメント保護と同時に、親しさや遊びなどの positive な次元が含まれているということを認めることで、親は養育者であるばかりではなく、教師でもプレイメイとでもあり得るという多面性が見えてくる。この視点に立てば、従来の研究で踏襲されてきた親子関係を縦、仲間関係を横とする固定した見方は事実を反映していないことになる。なぜならば、このような多様性を認める論考

からは、私たちの他者との関係は、大人であっても、子どもであっても、そして相手がピア（類似な年齢）であっても、年少であっても、年長であっても、いわゆる縦の関係も横の関係も含まれていると考えられるからである。このことは、子どもと関わっている時には、親は主に共同性・同等性（companionship）を感じている（Harach & Kuczynski, 2005）などの研究成果、また、幼い幼児でも自分と相手との主観的な年齢差の判断から、相手に求める行動を依存的な行動・態度と対等な行動・態度を区別して、場面ごとに使い分けることが、世界各地の文化圏で認められる（Edwards, 1998）、幼児初期の兄弟げんかの観察からで下の子は兄・姉と親とで自分に有利になるように行動を使い分ける（Dunn, 1988; Dunn & Munn, 1987）などの知見からも示唆される。つまり、私たちの行動は、このように文脈依存的（context-bound）でかつ可塑的であるといえる。このような他者との関わり合いに基本的な特性を、乳児の生得的間主観性理論の提唱である Trevarthen (1998, 2001) は Companionship* という用語で表している。それによれば、まず、日常での親と乳児とのやりとりの多くは、発達初期から楽しい状況で成され、生後6週間になると赤ん坊は、親しい人には友好的な微笑とクーイングで好意を示し始め（Trevarthen, 1979）、生後数ヶ月の乳児でも相手が働きかけに応じない不自然なコミュニケーションをとると、目を逸らしたり、抗議の発声・表出をしたりして不快感を表す（Murray & Trevarthen, 1985）という。したがって、乳児は他者と関わろうとする生得的な動機を備えて生まれてくる（Trevarthen, 2001）という。もし赤ん坊がそのような動機を備えているとすれば、乳児のそのような動機を満たすために、養育者もまた馴染みの顔と声を持つ思いやりのあ

る相手であると思われるような応答をしなくてはならない。このような発達初期からの親子の相互交流を Trevarthen は間主観性と呼び（Trevarthen, 1979; Trevarthen & Hubley, 1978）、その成立に必要なのはコンパニオンシップであり、この関係が成り立つことで、模倣、遊び、楽しみなどは、発達初期から親子で共有される（Trevarthen, 2001）という。したがって、子どもは親に保護ではなく、仲間（companion）としての同型的な関わり、すなわちコンパニオンシップを求める生得的な動機（motive）を持って生まれてくるのであり、アタッチメントは保護や世話などの養護的な（nurturant）行動の範囲に限定された関係に過ぎない（Trevarthen, 2006）と論じている。

このことは Bateson, (1979) が提起した原会話、Stern, (1985) の情動調律などの研究が発達初期から親子は情動を共有し、共同したやりとりを示すことを明示していることから支持されている。したがって、secure なアタッチメントだけが乳児の社会情動的な動機に応えるものではなく、出生直後から親子関係を成り立たせているのは間主観性であり、そこで展開されているのはコンパニオンシップなのだというのが Trevarthen の主張である。さらに、「A baby is ready for human company」という彼の主張（Trevarthen, 2001）が示しているように、これらのニーズへの理解がなければ、子どもたちがいかにして家族、そしてコミュニティ・社会の幸福で自信あるメンバーであることを学ぶのかは理解できないのではないだろうか。

（2）文化習得の場としてのコンパニオンシップ

これまでのほとんどの研究では、コンパニオンシップはピアに限定され、それがピアのなかで発達をするものとして追求されてきた。た

*脚注：COMPANIONSHIP は、同じ種としての共通性・同類性、交友・親交・付き合い、交際、仲良しであること、付き合いの相手などを意味し、基本的に「楽しいことを他者と一緒にすること、共有する」ことを意味する。友人（friend）、友情（friendship）とは意味的に近いが、「付き合いの楽しみ」に焦点が置かれている点で異なる次元を持っている。したがって、「広い意味での仲間として行動をともにすること」であり、「その楽しみ」という意味で、「仲間性」という訳語が使われてもいる（たとえば、Trevarthen et al. 1998 の訳本—中野他 2005）が、ここでは、「同じ権力・権限、能力、年齢、対等な地位にある」「仲間」を意味する peer との混同を避けるために、コンパニオンシップと表記することにする。

例えば、ピアーと Secure なアタッチメント関係にある児童は、より調和的で高いコンパニオンシップを含む友情を友達と育む (Kerns, Klepac, & Cole, 1996; Ladd, 1999; Youngblade & Belsky 1992) というように。このことは、これまで述べてきたアタッチメント研究が親子関係の多面性を、そして他の他者との多重な関係の中で発達している (Lewis & Takahashi, 2005) という事実をその決定論的な視点から覆い隠し (Levitt, 2005)、アタッチメント研究自体を現実の文脈を直視することから制約してきた結果によるのではないかと考えられる。最近、Kerns, et al. (2006) は、小学校中・高学年の子どもたちを対象とした研究から、子どもたちは不安や不快、恐怖を感じたとき、すなわちアタッチメントシステムが活性化したときには親の側にいることを好むが、遊びや秘密を共有するようなときには友達とのコンパニオンシップを好むという文脈を考慮にいたれた新しい視点を提出しているが、コンパニオンシップをピアーに限定する見方は依然として踏襲されたままである。Lewis (2005) は、social networks の立場からアタッチメント研究での親子関係に優越性を与える見方を批判して子どもはその社会情動的な発達に影響を与える多くの人々の中にいることを指摘しているが、同時に、親子のやりとりは平等な関係ではないので、そこで学んだスキルはピアー関係には転移しがたいという Mueller & DeStefano (1974) の主張を繰り返している。しかし、10 歳までは家族がコンパニオンシップの重要な提供者だったが、13 歳では家族は有意に低くなり、友達とのコンパニオンシップが高くなる (Buhrmester, & Furman, 1987) というように、コンパニオンシップの視点に立てば、両者の関係は不連続な、あるいは相容れないものではなく、相互関係の中で検討することが可能といえる。

このように従来の研究に認められてきたコンパニオンシップをピアー関係に限定をする見方は、結局は、アタッチメント理論の基本的な問題点を見落としてきたことと軌を一にしているといえよ

う。既に述べたように、アタッチメントの「secure base—探索動機」仮説では新しいことへの挑戦は子どもが自力で試行錯誤を通して成さなければならないことになり、子どもたちは親から学ぶことは想定していないことになるが、このことは、アタッチメント理論からは他者との協力による新しい思考・行動の発見、創出は説明できない (Trevvarthen, 2006) ことを示している。万一、コンパニオンシップの立場からは喜びや発見は母親だけではなく、どのような相手とも共有され、母親が担う役割は、祖父母や教師、近隣の人々など親しみを示す他の大人、子どもとの間でも成立できる (Trevvarthen, 2006) と考えられる。そうした関係の中で、Trevvarthen が主張するように、子どもたちは発達初期からコンパニオンシップを求める動機を持ち、それを通じて喚起される学習意欲は、家庭での親とのやりとりでの経験や目的を共有することで歴史・文化的意味体系の継承を可能にしているのである (Reddy & Trevvarthen, 2004; Trevvarthen, 2006, Trevvarthen & Aitken, 2001)。つまり、親は、単なる乳児の身体的欲求のケアやストレスの保護者、探索基地ではなく、コンパニオンとして乳児とともに会話・ゲーム・ジェスチャーを楽しみつつ、いわば横の関係の中でそのような文化学習の場を提供している (Nakano, 1998; Trevvarthen, 2001, 2006; Trevvarthen, et al., 1998) のである。

ところで、Wertsch (1985) によれば、間主観性の概念は Vygotsky の最近接領域 (ZPD) の中で最初に示唆されたという。大人と子どものコミュニケーションの中でこの世界の理解を理解するためには、相互的な意味の確立、つまり、間主観性の確立が課題となるが、“両者の合意点を見つけ出すことで、「ZPD 内での間主観性の成立点 (points of intersubjectivity in the zone of proximal development) を同定でき、そのような点の多くが間心理的 (interpsychological) な機能から個人内心的 (intrapsychological) 機能へ内化されていく」 (Wertsch, 1985, p. 161—162) のだという。この Vygotsky の考えでは、

間主観性は大人と子どもが理解したことを共有するための中核的媒体として考えられている。この考えに従えば、間主観性の実現の場としてのコンパニオンシップは、共同の学びの場といえる。したがって、日常生活の中で乳児が周囲の人々に求めているのは secure であること以上に、その社会に共通な意味 (common sense) であり (Trevvarthen, 2006)、コンパニオンシップが生み出す“関係的”な情動、共同への志向性は、まさに子どもを社会の中に取り込んでいくために最も洗練された、最も有効な動機づけとして機能している (Trevvarthen, 2001, p.108) のである。

このように、アタッチメントを子どもがこの社会の一員となるための意味・信念・言葉の文化学習の媒体としてみたときには明らかに不適切で不十分な概念といえる。それらはコンパニオンシップを通して伝達されているのである。いったん、この動機機構が発達初期から興味や経験を分かち合おうとしているということを受け容れれば、人間の情動は関係的であると同時に大人から学ぼうとする参照的であるということは容易に理解できる (Trevvarthen, 2001, p.117) のではないだろうか。

(3) 関係性の有機的システム論へ

このように論じてくると、コンパニオンシップこそが関係性の中核であり、アタッチメントは無意味なものだと主張しているかのように思われるかも知れない。しかし、ここでのゴールは、まさに、発達の理解に必要なことは乳児決定論を他の決定論に置き換えるのではなく、それ自体に代わるものでなければならないという Kagan (1998) の指摘に適ったものでなくてはならず、アタッチメントをコンパニオンシップに置き換え、それによってすべてを説明しようというのではない。ここまで、コンパニオンシップの意義、それに目を向ける必要性を論じてきたのは、そうではなく、アタッチメントの決定論的な視線によって、「子ども達は関係性の中で発達をしていく」というときの関係性の全体を理解できるような視点が忘れ去られていることに、そして、アタッチメントだけではなく、コンパニオンシップを含めた新しい統合的な視点が求められていることに、この分野の人々の注意を引くためである。

ところで Trevvarthen (2006) は、その時々 of 動機の違いによってコンパニオンシップ、アタッチメント、そして認知活動という異なった行動シ

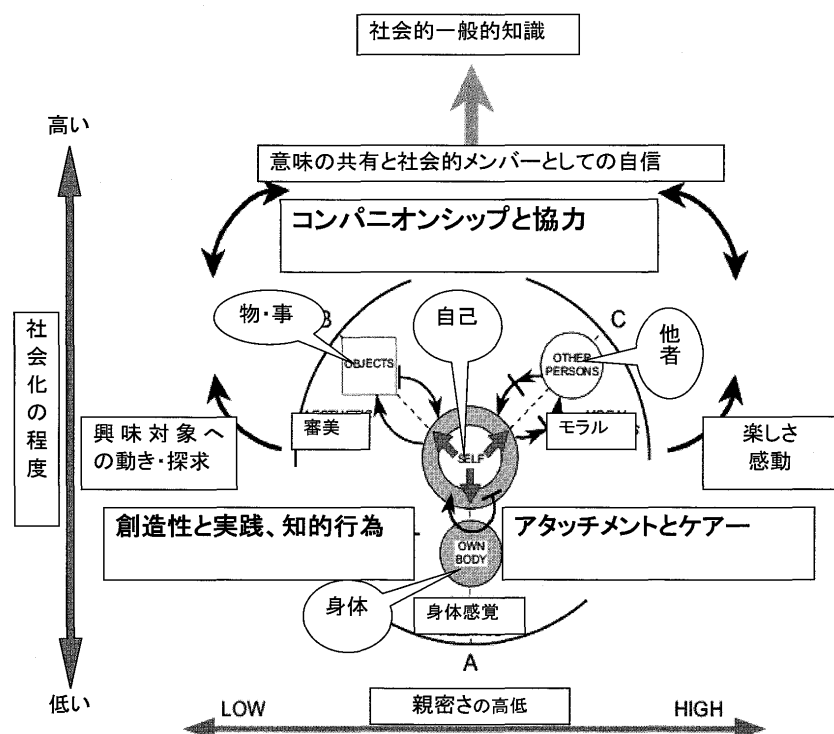


図-2

システムが有機的に生起することを論じ、そのようなプロセスを「アタッチメントの環 (the circle of attachments)」と呼んでいる。この主張によれば、まず、心的活動とそれに伴う経験には、1) 内的・外的受容器を通しての筋緊張、心拍、体力などの「自己の身体状態のモニター」に関するもの、2) 実践的で現実的な知性、場所や状況の意識、出来事への期待、物の概念など「物質と出来事」に関するもの、そして、3) 直覚的な知覚を通して他者への共感を表す「他の主体とその行動」に関するものがあり、これら3種類の行動と経験は、その動き、用いられる感覚、出現する情動で異なっている (Trevarthen 1993) という (図-2 参照)。とりわけ、身体外の二つの世界、物と人と関わる時には、それぞれ異なる期待を持つ。たとえば、物に近づいたとき、働きかけたときには何が起こるかを期待するし、一方、他者とのコミュニケーションでは、そこで起こることを見聞きしようと期待する。

これら二つの世界でのこのような異なる経験は異なる情動を伴い、そのプロセスもまた異なる。物への感情移入の情動は“美的 aesthetic,” という感情であり、他者との共感はその人の内的な状態や感情と関わり合う (Trevarthen, 1998)。

しかしながら、目的を達成しようとするときにはこれら身体、対物、対人の三つの行動すべてが結びついて働く (Trevarthen, 2006, p. 68) という。この考えは既に第二次間主観性 (Trevarthen & Hubley, 1978) として、9 か月頃に出現する「人—人—物意識」、ないし「共同理解」への大きな動機の変化として提唱されている。これに対して、麻生は、この変化は、「モノと人とをあたかも対になった対等な2つの項であるかのごとく見なす」ことで「人への関心とモノへの関心を統合した」 (麻生, 1997, p. 192) 結果生じると考えられていると誤った批判をしているが、既に述べたように、乳児は人に関わろうとする関係性への動機を持って生まれてくることで第一次間主観性と呼ばれる関係が親との間に出現する (Trevarthen, 1979)。物への動機はこの関係の中

から生まれていく。しかも、生後1 か月頃には物と人とで異なる働きかけをすることが観察されている (Trevarthen, 1998)。確かに麻生のいうように、乳児の周囲にある多くの物は養育者との関係の中で存在している (麻生, 1997) が、たとえば、親の手の中にあるが故にその物への動機が誘発されたとしても、第二次間主観性が出現する以前では、それを親と共有する行為 (たとえば、それを見て親に笑いかける) は認められないのである。それがある時期に突然、一連の行動として統合される (Trevarthen & Hubley, 1978) のが第二次間主観性というプロセスの意義だというのが Trevarthen の主張である。この大飛躍の頃には、親もまた、ふりやからかいを用いた共同遊びやゲームを展開し始める (Nakano, 2001, 2004; Trevarthen & Aitken, 2001)。したがって、この発達過程が関係性を考慮していないという批判 (麻生, 2001, p. 214) は、的を外した、あるいは枝葉末節なものではないだろうか。

ところで、Trevarthen (2006) は、子ども達が外界に向かうときの動機は、上述した身体の動き、物への関心、他者への期待が作り出す情動に方向づけられていて、それら二つの組み合わせによって、以下の行動が循環的に生じると提案している。つまり、まず、1) 物事を知ろう、何かのために道具を使おう、何かを創り出そう、探し出そうとするときには物への関心と身体の動きが「認知的、実践的行為」を導き、2) 他者にケアを求め、自己の身体的心地よさを求めるときには「アタッチメント」を志向し、3) 物への関心をパートナーと共有し、協力しようという場合には「コンパニオンシップ」に向かう (図-2) という。このように、異なる動機と情動が異なる関係の在り方を生み出しているというのである。そして、この世界を知り、他者に意味を伝えるための自信が作り出す自己の世界は、このようなダイナミックなサイクルの中で築かれていくと論じている。

さらに、このような視点に立つことで、これら3領域の研究が担う、あるいは期待できる分野を示唆している (表-1)。たとえば、80年代か

表－１：動機の違いによる活動領域・形態の分類（Trevarthen, 2006 を改変）

	アタッチメント	認知的創造的活動	コンパニオンシップ
働 き	世話、なぐさめ、保護の授受 養護の授受 愛情、性行為	物事の認知 実践、物の創造、スキル 性質や存在の探求	楽しさと情動の共有 コミュニケーションを通して文化や 物、行為の意味を学ぶ・教える
研究領域	比較行動学・臨床心理学	S-R 学習理論 認知心理学	間主観的心理学
応 用	育児・介護 社会福祉、心理療法	科学、エンジニアリング、テクノロジー	発達障害への心理学的支援 社会的対人的関係改善 教育

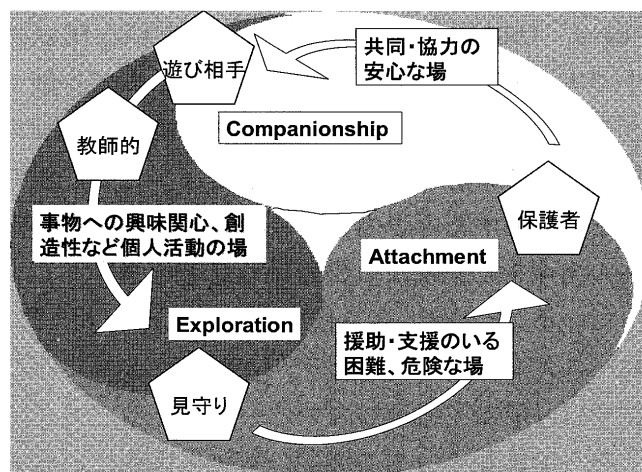
ら 90 年代始めに実験室で行われた自閉症児のアタッチメント実験からはこの子たちが健常児と変わらないアタッチメントを養育者に示すことが見出されている（Capps, Sigman, & Mundy, 1994; Rogers, Ozonoff, & Maslin-Cole, 1991）し、同じような発達水準にある他の発達障害児と比べても自閉症児だけが不安定なアタッチメントを示すということではなく、健常児同様に母親の sensitivity と responsivity がアタッチメントの質に影響をすることが示されている（Capps et al., 1994）。しかし、そのような自閉症児のアタッチメントが健常児と全く同じ関係を養育者と築くのかには多くの疑問の余地がある（National Research Council, 2001）が、たとえ異質な形であっても、アタッチメントを示すことは確かといえよう。したがって、自閉症の問題はよく知られているように、対人的コミュニケーションが困難なことに基本的な問題があり、親子のアタッチメントを構築するように指導するよりもコンパニオンシップの問題として捉えて指導する（Trevarthen, et al., 1998）方が有効な支援となるとなるのではないだろうか。一方、たとえば、子どもの頃の虐待経験の影響が大人になってからの愛情ある関係形成の困難となるかの指標としてアタッチメントを測定する（e. g., McCarthy & Taylor, 1999）ような用い方もあり得るだろう。つまり、従来、いわば縦の問題として捉えられてきた現象を横の問題として、あるいはその逆、さらには両者の絡み合いの問題として捉えることで、人間の発達を理解するための豊かな視点が生み出されるのではないかとはいえよう。

したがって、このような多重かつ有機的な関係

性のシステム、それも子どもの動機を考慮に入れた発達システムの視点に立つことで、決定論を超えた文脈的、システム的な理論へと歩を踏み出すことができるのではないかと期待される。

結 論：統合的視点に向けて

これまで論じてきたように、発達しつつある存在が多面的、有機的な影響のシステムの中にいることは、既に、Bronfenbrenner（1979）の生態学的システムモデルから主張されてきた。しかし、それ以来、四半世紀がたつにもかかわらず、上で論じてきたように、乳児決定論に代表される直線的な関係モデル、とりわけアタッチメント研究の強力な方法論と成果によって、親、特に母親の存在意義はアタッチメントの対象としての敏感な応答性を伴うケアと保護に押し込められてきたといえよう。母子相互作用や間主観性が強調してきた共同性、相互性は、保護者という親の役割の中でしか捉えられることがなかったのである。



図－３：関係のサイクルと親の多重役割

しかし、親の役割は固定したものではなく、親子の関わりの方の文脈に依存して、そこでの親子両者の動機によって出現し、推移すると考えられる。たとえば、子どもに何かを知ってほしいと親が思ったときには、親は教師的な立場で子どもに関わるかも知れない。子どもも教えてもらうことを喜ぶだろう。だが、子どもが自力で対象と関わり始めると、親はそれを見守るだろう。一方、子どもの自力での活動が挑戦的、冒険的で不安が高まっていくような場合には、子どもはその課題に向かえるだけの親のサポートを、あるいは失敗した場合には慰めを求めるだろう。このような場合には、親は保護者としての役割を取るようになるだろう。さらに、親子が安心できる楽しい場、ゲームや遊びの文脈では、親は遊び相手として、親自身もそこでのやりとりを楽しむだろう。

このようなプロセスを概念的に表したのが図-3である。この図は、上記の Trevarthen が提案した関係性のサークルに親の役割を加えて修正をしたものであるが、親子関係の多面的関係性の有機的システムモデルを示している。既に述べてきたように、関係性の多面性を解明することの必要性は、これまで何度もいわれてきた (Cicchetti ら, 1990; Grossmann & Grossmann, 2000; Maccoby, 1992) が、残念なことに未だに緒に就いていないのは、多分、アタッチメント理論に釣り合うだけの理論・概念の不在にも一因があるといえよう。上で述べた Lewis らの social-network モデル (Feiring & Lewis, 1989; Lewis, 2005) は、子どもの発達が多様な関係の中で実現されていくことを論じている点で評価できるが、親とピアーとはそれぞれに特有な役割を担っていることを強調することで、かえって親の役割を固定するとともに、親からピアーへの関係性の発達を不連続なものとする見方を強めてしまっている。つまり、ここまで考察してきたように、親への対立概念としてピアーの固有性を論じることでは、成功には至っていないのである。

そうではなく、この問題の解決には共にいる人との関係であるコンパニオンシップに注意を向け

ることで、親とピアーだけではなく、その子に愛情を向けて共にいる人々すべてを含めた人と人との間に個別の文脈の中で生み出される動機に適切な役割を演じて多重な関わり合いを実現しているのかが明らかになるといえよう。さらに、そのような人々の輪 (サークル) の中で子どもたちがどのように発達を遂げていくのかの統合な視点を得ることができるのではないかと期待される。このように、アタッチメントとコンパニオンシップの相違と関係性を実証的に明らかにしていくことで、この分野の今後の研究は大きく発展を遂げていけるのではないかと考えられる。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S. (1991). Attachment and other affectional bonds across the life cycle. In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle*, 33-51. New York: Routledge.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Arend, R., Gove, F.L., & Sroufe, L.A. (1979). Continuity of individual adaptation from infancy to kindergarten: A predictive study of eco-resiliency and curiosity in preschoolers. *Child Development*, 50, 950-959.
- Armsden, G. C., & Greenberg, M. T. (1987). The Inventory of Parent and Peer Attachment: Relationships to well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 427-454.
- 麻生 武 (1997). 身振りからことばへ 東京: 新曜社
- 麻生 武 (2001). 発達における共同性 下山晴彦、丹野義彦 (編) 講座臨床心理学5、発達臨床心理学、211-236. 東京: 東京大学出版会
- Bateson, M. C. (1979). The epigenesis of conversational interaction: A personal account of research development. In M. Bullowa (Ed.), *Before speech: The beginning of human communication*,

- 63-77. London: Cambridge Univ. Press.
- Baumrind, D. (1969). Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 75, 43-88.
- Belsky, J. & Cassidy, J. (1994). Attachment: Theory and evidence. In M. L. Rutter, D. F. Hay & S. Baron-Cohen (Eds.), *Development through Life: A Handbook for Clinicians*, 373 - 402. Oxford: Blackwell.
- Booth, C., Rose-Krasnor, L., MacKinnon, J., & Rubin, K.H. (1994). Predicting social adjustment in middle childhood: The role of preschool attachment security and maternal style. Special Issue: From family to peer group: Relations between relationships systems. *Social Development*, 3, 189-204.
- Bowerman, C. E., & Kinch, J. W. (1959). Changes in family and peer orientation of children between the fourth and tenth grades. *Social Forces*, 37, 206-211.
- Bowlby, J. (1953). *Childcare and the growth of love*. Harmondsworth: Penguin.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss, vol.1: Attachment*. New York: Basic Books. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子訳 (1976) 母子関係の理論 I - 愛着行動 岩崎学術出版社
- Bronfenbrenner, U. (1979). *The ecology of human development: Experiments by nature and design*. Cambridge: Harvard University Press.
- Bronson, W. C. (1981). Toddlers' behaviors with age mates: Issues of interaction, cognition, and affect. Norwood, NJ: Ablex.
- Bruer, J. T. (1999). *The myth of the first three years: A new understanding of early brain development and lifelong learning*. New York: Free Press.
- Buhrmester, D. & Furman, W. (1987). The development of companionship and intimacy. *Monographs of the society for research in child development*, 58, 1101-1113.
- Capps, L., Sigman, M., & Mundy, P. (1994). Attachment security in children with autism. *Development and Psychopathology*, 6, 249 - 261.
- Cassidy, J. (1994). Emotion regulation: Influences of attachment relationships. In N. A. Fox (Ed.), *The Development of Emotion Regulation: Biological and Behavioral Considerations. Monographs of the Society for Research in Child Development*, 59 (Serial No. 240).
- Cassidy, J., Scolton, K. L., Kirsh, S. J., & Parke, R. D. (1996). Attachment and representations of peer relationships. *Developmental Psychology*, 32, 892 - 904.
- Cohn, D. A. (1990). Child-mother attachment of six-year-olds and social competence at school. *Child Development*, 61, 152-62.
- Contreras, J. M. & Kerns, K. A. (2000). Emotion regulation processes: Explaining links between parent - child attachment and peer relationships. In K. A. Kerns, J. M. Contreras & A. M. Neal-Barnett (Eds.), *Family and Peers: Linking Two Social Worlds* (pp. 1 - 25). Westport, CT: Praeger.
- Contreras, J. M., Kerns, K. A., Weimer, B. L., Gentzler, A. L. & Tomich, P. L. (2000). Emotion regulation as a mediator of associations between mother - child attachment and peer relationships in middle childhood. *Journal of Family Psychology*, 14, 111 - 124.
- Crittenden, P.M. (1988). Relationships at risk. In J. Belsky & T. Nezworski (Eds.), *The clinical implications of attachment*, 136-174. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.
- 土居健郎 (1976). 甘えの構造 東京：弘文堂
- Dunn J. & Munn, P. (1987) . Development of justification in disputes with mother and sibling. *Developmental Psychology*, 23, 791-170.
- Dunn, J. (1988). *The beginning of social understanding*. Cambridge, MA: Harvard Univ. Press.
- Durkin, K. (1995). *Developmental Social Psychology*;

- From Infancy to Old Age*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Edwards, C. P. (1998). The company children keep: Suggestive evidence from cultural studies. Braten, Stein (Ed.), (1998), *Intersubjective communication and emotion in early ontogeny*, 169–183. New York: Cambridge University Press.
- Feiring, C. & Lewis, M. (1989). The social networks of girls and boys from early through middle childhood. In D. Belle (Ed.). *Children's Social Networks and Social Supports*, 119–150. New York: John Wiley and Sons.
- Field, T., Diego, M., & Sanders, C. (2002). Adolescents' parent and peer relationships. *Adolescence*, 37, 121–130.
- Fromberg, D. P. & Bergen, D. (1998). Play from birth to twelve and beyond: Contexts, perspectives and meaning. New York: Garland.
- Grossmann, K. E., Grossmann, K., & Zimmermann, P. A. (1999). Wider view of attachment and exploration: Stability and change during the years of immaturity. J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications*. 760–786. New York: Guilford Press.
- Grossmann, K., & Grossmann, K. E. (2000). Parents and toddlers at play: Evidence for separate qualitative functioning of the play and the attachment system. Crittenden, P. M., & Claussen, A. H. (Eds.), *The organization of attachment relationships: Maturation, culture, and context*, 13–37. New York: Cambridge University Press.
- Harach, Lori D. & Kuczynski, Leon J. (2005). Construction and maintenance of parent—child relationships: Bidirectional contributions from the perspective of parents. *Infant and Child Development*, 14, 327–343.
- Hartup, W. W. (1989). Social relationships and their developmental significance. *American Psychologist*, 44, 120–126.
- Hobson, Peter. (2002). The cradle of thought. Basingstoke, U. K.: Macmillan Education Ltd.
- Kavesh, L. B. (1992). Antecedents of peer competence in childhood. *Dissertation Abstracts International*, 53(3-B).
- Jacobson, J. L., & Wille, D. E. (1986). The influence of attachment pattern on developmental changes in peer interaction from the toddler to the preschool period. *Child Development*, 57, 338–347.
- Kagan J. (1998). *Three Seductive Ideas*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Kavesh, L. B. (1992). Antecedents of peer competence in childhood. *Dissertation Abstracts International*, 53 (3-B).
- Kerns, K. A., Klepac, L., & Cole, A. K. (1996). Peer relationships and preadolescents' perceptions of security in the child–mother relationship. *Developmental Psychology*, 32, 1996:457–66.
- Kerns, K. A., Tomich, P. L. & Kim, P. (2006) Normative Trends in Children's Perceptions of Availability and Utilization of Attachment Figures in Middle Childhood. *Social Development*, 15, 1–22.
- 近藤清美 (2001) アタッチメントの形成と発達 岡野恒也 (監修) 牧野順四郎ほか (編) 社会性の発達心理学 東京 : アートアンドブレーン
- LaFreniere, P. J., & Sroufe, L.A. (1985). Profiles of peer competence in the preschool: Interrelations between measures, influence of social ecology, and relation to attachment history. *Developmental Psychology*, 21, 55–69.
- Ladd, G. W. (1999). Peer relationships and social competence during early and middle childhood. *Annual Review of Psychology*, 50, 333–359.
- Larson, R. & Richards, M. H. (1991). Daily Companionship in Late Childhood and Early Adolescence: Changing Developmental Contexts. *Child development*, 62, 284–300.
- Laursen, B. & Bukowski, W. M. (1997). A

- developmental guide to the organisation of close relationships. *International Journal of Behavioral Development*, 21, 747-770.
- Levitt, M. J., (2005). Social Relations in Childhood and Adolescence: The Convoy Model Perspective. *Human Development*, 48, 28-47
- Levitt, M.J. (2005). Social Relations in Childhood and Adolescence: The Convoy Model Perspective. *Human Development*, 48, 28-47
- Lewin, K., Lippitt, R., & White, R. K. (1939). Patterns of aggressive behavior in experimentally created social climates. *Journal of Social Psychology*, 10, 271-301.
- Lewis, M. & Takahashi, K. (2005). Beyond the Dyad: Conceptualization of Social Networks. *Human Development*, 48, 5-7.
- Lewis, M. (2005). The Child and Its Family: The Social Network Model. *Human Development*, 48, 8-27.
- Lieberman, A. F. (1977). Preschoolers' competence with a peer: Relations with attachment and peer experience. *Child Development*, 48, 1277-1287.
- Lieberman, M., Doyle, A. & Markiewicz, D. (1999). Developmental patterns in security of attachment to mother and father in late childhood and early adolescence: Associations with peer relations. *Child Development*, 70, 202 - 213.
- Lyons-Ruth, K. (1996). Attachment relationships among children with aggressive behavior problems: The role of disorganized early attachment patterns. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 64 - 73.
- MacDonald, K. (1992). Warmth as a developmental construct: An evolutionary analysis. *Child Development*, 63, 753-773.
- MacDonald, K. (1993). Parent-child Play: An evolutionary perspective. K. MacDonald (Ed.), *Parent-child Play: Descriptions and Implications*, 113-143. New York: State University of New York Press.
- Maccoby, E. E. (1992). The role of parents in the socialization of children: An historical overview. *Developmental Psychology*, 28, 1006-1017.
- Maudry, M. & Nekula, M. (1939). Social relations between children of the same age during the first two years of life. *Journal of Genetic Psychology*, 54, 193-215.
- McCarthy, G. & Taylor, A. (1999). Avoidant/ambivalent attachment styles as a mediator between abusive childhood experiences and adult relationship difficulties. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 40, 465-477.
- 三宅和夫 (編著). (1991). 乳幼児の人格形成と母子関係. 東京大学出版会.
- Mueller, E. & DeStefano, C. (1974). Source of toddler's peer interaction in a playground setting. *Early Child Development and Care*, 77.
- Murray, L. & Trevarthen, C. (1985). Emotional regulation of interaction between two-months old and their mother. In T. M. Field & N. A. Fox (Ed.), *Social perception in infancy*, 177-198. New Jersey: Ablex.
- NICHD (Early Child Care Research Network) (Ed.), (2005) *Child Care and Child Development : Results from the NICHD Study of Early Child Care and Youth Development*. The Guilford Press; New Ed edition.
- 中根千枝 (1967). タテ社会の人間関係—単一社会の理論 講談社現代新書 東京: 講談社
- Nakano, S. (1998). Toward a sympathetic propensity theory of mind. *Annual Report of Research and Clinical Center for Child Development* 20, 81-91.
- Nakano, S. (2001). The basic structure of metacommunication in intersubjective fun-interactions between mothers and infants. *Annual Report of Research and Clinical Center for Child Development*, 23, 39-49.
- Nakano, S. (2004). A theory of Dekigoto (event /incident/ happening) interaction: Evoking, expressing and sharing emotion and pretense.

- Annual Report of Research and Clinical Center for Child Development*, 26, 79-93.
- 中野 茂 . (1991). 乳幼児期から就学前時にかけての社会・情動的行動の連続性 . 三宅和夫 (編) 乳幼児の人格形成と母子関係 , 167-188. 東京大学出版会 .
- National Research Council. (2001). *Educating children with autism*. Washington (DC): National Academy Press.
- Parten, C. (1932). Social participation among preschool children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 27, 243-269.
- Pastor, D. L. (1981). The quality of mother-infant attachment and its relationship to toddlers' initial sociability with peers. *Developmental Psychology*, 17, 326-335.
- Piaget, J., (1967). *Le Comportement, Moteur de L' evolution*. Paris: Gallimard. 芳賀純訳 (1987) 行動と進化、東京：紀伊國屋書店
- Pierrehumbert, B., Iannotti, R. J., Cummings, E. M., & Zahn-Waxler, C. (1989). Social functioning with mother and peers at 2 and 5 years. *International Journal of Behavioral Development*, 12, 85-100.
- Reddy, V. (2001). Infant clowns: The interpersonal creation of humour in infancy. *Enfance* 3, 247 - 256.
- Reddy, V., & Trevarthen, C. (2004). What we learn about babies from engaging with their emotions. *Zero to Three, January 2004*, 9-15.
- Reddy, V., Hay, D., Murray, L., & Trevarthen, C. (1997). Communication in infancy: Mutual regulation of affect and attention. In G. Bremner, A. Slater, & G. Butterworth (Eds.), *Infant development. Recent advances*, 247-273. Hove, East Sussex: Psychology Press.
- Rogers, S. J. Ozonoff, S., & Maslin-Cole, C. (1991). A comparative study of attachment behavior in young children with autism or other psychiatric disorders. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 30, 483 - 488.
- Rutter, M. (1995). Clinical implications of attachment concepts: retrospect and prospect. *Child Psychology and Psychiatry*, 36, 549-571.
- Rutter, M. (1998). Developmental catch-up, and deficit, following adoption after severe global early privation. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 39, 465-476.
- Rutter, M. (1999) Psychosocial adversity and child psychopathology. *British*
- Rutter, M. (1978) . Early sources of security and competence. In J. S. Bruner & A. Garton (Eds.), *Human growth and development*, 33-61. _Oxford: Oxford University Press.
- Saferstein, J. A, Neimeyer, G. J., & Hagans, C. L. (2005). Attachment as a predictor of friendship qualities in college youth. *Social Behavior and Personality*. 33, 767-776.
- Schneider, B. H., Atkinson, L. & Tardif, C. (2001). Child - parent attachment and children's peer relations: A quantitative review. *Developmental Psychology*, 37, 86 - 100.
- Selby, J. M., & Bradley, B. S. (2003). Infants in Groups: Extending the Debate. *Human Development*, 46, 197-221.
- Sroufe, L. A. (1983). Infant-caregiver attachment and patterns of adaptation in preschool: The roots of maladaptation and competence. In M. Perlmutter (ed.), *Minnesota Symposia of Child Psychology*, 16, 41-83.
- Sroufe, L. A. (1979). Socioemotional development. In: Osofsky J, ed. *Handbook of Infant Development*, 462-516. New York: Wiley.
- Sroufe, L. A., Fox, N. A., & Pancake, V. R. (1983). Attachment and dependency in developmental perspective. *Child Development*, 54, 1615-1627.
- Steinberg, L. (1987). Recent research on the family at adolescence: The extent and nature of sex differences. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 191 - 165.
- Steinberg, L., & Silverberg, S. B. (1986). The

- vicissitudes of autonomy in early adolescence. *Child Development*, 57, 841-851.
- Stern, D. (1985). *The interpersonal world of the infant*. New York: Basic Books.
- Strauch, B. (2003). *The Primal Teen; What the New Discoveries About the Teenage Brain Tell Us About Our Kids*. Toronto: Random House.
- Suess, G.J., Grossmann, K. E., & Sroufe, L. A. (1992). Effects of infant attachment to mother and father on quality of adaptation in preschool: From dyadic to individual organisation of self. *International Journal of Behavioral Development*, 15, 43-65.
- Sullivan, H. S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton.
- Thompson, R. A. (1998). Early sociopersonality development. In W. Damon (Ed.), *Handbook of Child Psychology*, 25 - 104. New York: Wiley.
- Thompson, R. A., (2005). Multiple relationships multiply considered. *Human Development*, 48, 102-107.
- Trevarthen, C. (1979). Communication and cooperation in early infancy. A description of primary intersubjectivity. In M. Bullowa (Ed.) *Before speech: The beginning of human communication*, 321-347. London: Cambridge University Press.
- Trevarthen, C. (1993). The function of emotions in early infant communication and development. In J. Nadel & L. Camioni (Ed.), *New Perspectives in Early Communicative Development*, 48-81. London: Routledge.
- Trevarthen, C. (1998). The concept and foundation of infant intersubjectivity. I S. Bråten (ed.). *Intersubjective communication and emotion in early ontogeny*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Trevarthen, C. (2001). Intrinsic motives for companionship in understanding: Their origin, development and significance for infant mental health. *Infant, Mental Health Journal*, 22, 95-131.
- Trevarthen, C. (2006). Stepping away from the mirror: Pride and shame in adventures of companionship. C. Sue Carter, Lieselotte Ahnert, K. E. Grossmann, Sarah B. Hrdy, Michael E. Lamb, Stephen W. Porges & Norbert Sachser (Eds.) *Attachment and bonding : A New Synthesis (Dahlem Workshop Reports)*, 55-84. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Trevarthen, C. and Aitken, K. J. (2001). Infant intersubjectivity: Research, theory and clinical applications. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 42, 3-48.
- Trevarthen, C., & Hubley, P. (1978). Secondary intersubjectivity: Confidence, confiding and acts of meaning in the first year. In A. Lock (Ed.) *Action, gesture and symbol*, 183-229, London: Academic Press.
- Trevarthen, C., Aitken, K. J., Papoudi, D., & Robarts, J. Z. (1998). *Children with autism: Diagnosis and interventions to meet their needs*. (Second Edition). London: Jessica Kingsley.
- 中野 茂・伊藤良子・近藤清美 (訳編) (2005) 「自閉症の子どもたち」、ミネルヴァ書房
- Vandell, D. L. & Mueller (1980). Peer play and friendships during the first two years. In H. C. Foot, A. J. & J. R. Smith (Eds.) *Friendships and social relationships in children*, 181-208. New York: John Wiley.
- Waters, E., Corcoran, D., & Anafarta, M. (2005). Attachment, Other Relationships, and the Theory that All Good Things Go Together. *Human Development*, 48, 80-84.
- Waters, E., Wippman, J., & Sroufe, L. A. (1979). Attachment, positive affect, and competence in the peer group: Two studies in construct validation. *Child Development*, 50, 821-829.
- Weimer, B. L., Kerns, K. A., & Oldenburg, C. M. (2004). Adolescents' interactions with a best friend: Associations with attachment style. *Journal*

of Experimental Child Psychology, 88, 102-120.

Wertsch, J. V. (1985). *Vygotsky and the social formation of the mind*. Cambridge, MA:

Winnicott, D. W. (1992). *Babies and their mothers*. Reading, MS: Addison-Wesley Publishing.

Youngblade, L. M., & Belsky, J. (1992). Parent-child antecedents of 5-year olds' close friendships: a longitudinal analysis. *Developmental Psychology, 28, 700-13.*

Youngblade, L., Park, K., & Belsky, J. (1993). Measurement of young children's close friendship: A comparison of two independent assessment systems and their associations with attachment security. *International Journal of Behavioral Development, 16, 563-587.*